

第1部

対談

カレッジスポーツのポテンシャル ～スポーツを通じた社会貢献とその未来像～

佐藤 雅幸 (専修大学スポーツ研究所長)

松浪 健四郎 (日本体育大学理事長)

山田 健太 (専修大学文学部教授)

山田 松浪先生、よろしくお願ひします。佐藤先生、よろしくお願ひします。

面白い話でした。また、大変になりました。最初、厳しいというか、専修大学への暖かいエールから始まり、その後は、スポーツの起源、そして、稽古というキーワードが出てきました。最後は、多分、多くの方がそうだろうと予想したと思いますが、オリンピック・パラリンピックについて話をしていただき、しかも、最後は、メダルの問題ではなく、スポーツの文化的価値をどう高めていくか、われわれはどういう心構えでオリンピック・パラリンピックに臨めばいいかという話で締めていただき、大変勉強になったと思います。

今日は、今の松浪先生の話を受けて、少し難しい話になるかもしれませんが、カレッジスポーツに焦点を当てて40分程対談という形で進めていきたいと思っています。それから、休憩を挟んで、今度は、現在実際に大学スポーツをやっている選手、あるいは、一番近いところで大学スポーツを支えているお二人に登壇いただいてシンポジウムに移っていきたいと思っています。

今日、松浪先生と佐藤先生を壇上に呼んでいるのには各々の意味があると思います。国際レベルのアスリートを育成し、カレッジスポーツ戦略に情熱的に取り組み、そして、体育系大学として日本を代表する日本体育大学の理事長を務められている松浪先生。

そして、古豪と言われて、多分野の体育会活動を幅広く展開している専修大学を皆さんは知っていますか。知っている人も居るかも

しませんが、今、体育会は43部あります。非常に多くの体育会活動を展開し、総合大学としての専修大学の中にあるスポーツ研究所の所長である佐藤先生。まさに日本を代表する立場で体育を引っ張っているお二人の先生と、日本のカレッジスポーツについて考えることが今日の大きなテーマとなります。

早速ですが、最初は、専修大学へのエールから始まりましたが、日本体育大学の話も少ししていただこうと思っています。今日、皆さんのお手元に配っているプリントに、読売新聞の切り抜きで、「世界一を目指す」という非常に力強い言葉が入っています。この、「世界一を目指す」ということについてお話いただけますか。

松浪 世界一というのは、一番ハードルが高いということです。ですから、一番高いハードルを越える、つまり、常に努力していなければそのハードルを越えることはできません。低いところに目標を設定しておく、もし達成しなければ何もなくなります。達成できないかもしれないけれども高い目標を持ち続けなければいけません。

ここに居る学生諸君はどの程度の志を持っていますか。つまり、志は高くなければ努力をしません。努力をするために目標を高く掲げます。そして、何年掛かるか分かりませんが、とにかく努力をしなければなりません。ですから目標は高くなければいけません。2番では駄目ですか、と言われれば2番では駄目です。1番でなければ駄目だと思っています。

山田 それで言うと、まさにナンバーワンという意味合いだと思いますが、割合最近の言葉としてオンリーワンというのがあります。先生は、オンリーワンとナンバーワンの違いをどう考えていますか。

松浪 私のヘアスタイル(長髪、後ろ結び)を見てもらうと分かりますが、私は、専修大学の教授になってすぐにこのヘアスタイルにしました。すると、テレビ各局は珍しいヘアスタイルの先生が居るということで取材にきました。皆さんのお母さんぐらいは、私が毎日のようにテレビに出ていた頃を知っているかもしれません。「エバラ焼き肉のたれ」のCMマーシャルに出たりして、専修大学の教員としては相当変わったことをやりました。これがオンリーワンです。ですが、世界一でもなければ日本一でもありません。

ですから、特色がオンリーワンであって、実力が付いてくるかこないかは別問題だと思います。オンリーワンも大切だと思います。つまり、一山いくらの人間になってはいけなし、己の持っている個性をどこまで磨くかということが本人の努力で大切なことと思っています。

(指で指して) あそこで寝ている人はアウトです。私が教員をやっているときは、そういう学生には絶対単位を出しませんでした。先生方に厳しく指導してもらいたいと思います。

山田 今の言葉で3人ぐらい目を覚まし

佐藤 雅幸



松浪 健四郎



山田 健太



た。あともう1人は寝ています。今の話をもう少し続けたいと思います。では、今度はナンバーワンのほうです。日本体育大学がナンバーワンを目指すことを、もう少し具体的に話していただけますか。

松浪 ナンバーワンというのは、同じルールで、「用意ドン」でスタートして一番になることです。オンリーワンは違います。特色ですから、レースでも競争でもなんでもありません。ですから、メジャーになるためにはナンバーワンにならなければいけません。それは、学問でやるのか、競技でやるのか、いろいろあると思います。

私立大学は財政的にいろいろな問題があって難しい一面もありますから、私は、小さくてもキラッと光る魅力的な大学を目指します。そうすることによって、世界一の体育大学になれると思っています。

山田 ありがとうございます。ここで、佐藤先生にマイクを向けます。今の話は、体育大学に限らず、文化系の総合大学である私たちの専修大学でも言えることかもしれません。私は、電車内でこの今年の出雲駅伝の中吊りを見てびっくりしました。専修大学は出雲駅伝に出ていません。出ていないというのはあまりにも自虐的ですが、箱根駅伝も3年振りにやっと本戦出場という中で、なぜか中吊りの絵には、「歓迎専修大学」と歓迎されています。専修大学がいかに歴史を持っているかということの現れだと思いましたが、この

辺も含めて、一体専修大学に何ができるのか、何をしているかということ、少し具体的に紹介してください。

佐藤 私は、専修大学に入職する前は日体大に勤めていました。それは31年前ですが、私もテニスをやっていたので、どうせやるなら日本一になりたいと思っていました。そのときに、松浪先生の上司の人が居ましたが、「佐藤さん、いいかな。勝ち負けは普遍ではない。文化は普遍なんだ」という言葉をいただきました。

当時、専修大学では前嶋先生率いるスピードスケート部が世界で戦っていました。世界を見ている人のそばに居れば、日本一は訳無いという感じがしていました。

その当時の専修大学には勢いがありましたが、スポーツだけでなく、教職員、学生も含めて皆に物凄い勢いがあったような気がします。

山田 大学全体という話ですが、今の私たち教員も含めて、学生諸君はあまり知らない90年代の話がたくさん出ています。少しご紹介いただけますか。

佐藤 私が入ったときにさまざまな出来事が起こりました。まずは日本大学のフェニックスがですが、アメリカンフットボールで連覇をしていました。なんと、その連覇を止めたのが専修大学のグリーンマシンでした。そして、横浜の会場には溢れんばかりの学生・教職

員が応援に行きました。

その次は相撲です。専大生だったオソの愛称で親しまれた武双山が日本一になり、相撲の世界に入っていました。そして私事ですが、専修大学の女子テニス部は園田学園の連覇を止めて優勝しました。

今度は水泳部の水球です。水泳も非常に勢いがあった時代で、オリンピック選手も出ましたが、連勝記録を作り、ギネスブックにも載っている日体大の水球部を、なんと専修大学の水球チームが破り連勝記録を止めました。こんな時代でした。

山田 この辺の話は松浪先生にも思い出があり、とても詳しい話がたくさんあると思います。先ほど、キラリと光るものという話をされましたが、学生の皆さんの親世代でも400校あった大学、中には体育に懸けていると言いたい過ぎですが、非常に大きなお金を投資してナンバーワンを目指す大学も出てきています。その中で、大学としてカレッジスポーツを支えることはなかなか難しい時代になってきていると思いますが、この辺をどうお考えですか。

松浪 言われるように、昔は難しかったと思います。ですが、今は産・官・学の連携でいろいろなことができます。例えば、この催しも大塚製薬が応援してくれています。知恵を出せばできると思います。

間もなく新聞発表をしますが、日体大はF1レーサーを作ろうと思っています。ですが、



練習場もなければ1台の車もありませんが、トヨタと提携をすることによって、トヨタから自動車をもって、富士スピードウェイとその他の寮を借りて実技をします。

山田 今の話と全く違いますが、初耳です。

松浪 つまり、大学にはないけれども、民間の力を借りてやっていくことができます。そういう知恵を出す時代に差しかかっていると思います。

山田 少し驚きましたが、逆に、昔より今のほうがやりやすいと考えていいですか。

松浪 オリンピックはプロもアマもなくなりました。東北福祉大学には松山君というプロゴルファーが居ます。彼が所属しているのは大学なので、大学がプロゴルファーの学生を応援しています。昔では考えられなかったことです。

私はそこからヒントを得て、本学の2年生に成田美寿々というプロゴルファーが居ます

が、これを日体大所属にして応援をしています。彼女は、今年4000万円近くを稼いでいますが、リオのオリンピックに出てくれればいいと思っています。ですから、発想はプロもなければアマもありません。大学はそこまでやらなければいけない時代を迎えているのに、先生方の理解が足りないと思います。

山田 ということですが、佐藤先生は今の話を受けて、今、どういうことをしていますか。

佐藤 これは、言われて非常に苦しいことです。昨年立ち上げられたスポーツ戦略委員会ができ、先般解散しましたが、そこでいろいろな議論が上がりました。ところが、専修大学という大学は非常に真面目な大学です。ですから、大きな改革がなかなかできないのが現状です。ただ、アイデアはたくさん提供しているので、大学がそれをどうするかということがポイントになると考えています。

山田 苦しいと知った上で敢えて質問しました。専修大学の場合、大きなお金を投資し

て、いわゆるトップアスリートを呼んでくる、あるいは育成するのはなかなか難しいかもしれません。一方で、今日のテーマの一つである地域との関係で、もちろん他大学もやっていることですが、地域に根差したスポーツ活動にしようという点では現在進行形かもしれませんが、そちらの点はどうですか。

佐藤 スポーツ研究所では、専修大学を応援してくれる一般の方々、ファンを作らなければいけないと思います。そして、地域の人たちのために、さまざまなスポーツ教室などをやって専修大学のファンを作りながら、それに参加してくれる方々の健康や生きがいに対して寄り添えるように活動している状況です。

山田 今の話は、また後で少し詳しく聞きたいと思います。ここで、もう一度マイクを戻します。スポーツを考える場合、昔から、トップダウンなのかボトムアップなのかという議論があります。競技力なのか、生涯スポーツなのかと。そうすると、オリンピック

はどちらかというと競技力アップのスポーツ政策に近いのかもしれませんが。一方では、当然選手層を厚く、底を厚くしなければいけないので生涯スポーツの振興も必要です。この辺の関係で言うなら、日本体育大学あるいは松浪先生は、どういう形でカレッジスポーツを活用しようと思っていますか。

松浪 まず、チームとクラブの違いを知っておかなければいけません。チームはトップダウンです。目的は勝利です。上で指揮する監督が、どういう考えを持ってどんな戦略を持ってチームを作るか、勝つための手段を作っていきます。

もう一つにクラブがあります。クラブは、みんなが持ち回りでリーダーになる、つまりボトムアップであって平等です。そこでは楽しんでやるわけで、誰も勝たなくていいです。だから私は、体育会ということになるとチームだと思います。同好会・愛好会はクラブだと思っています。

けれども、こんなレベルの低いところでやりたくない、チームに行きたいと思うかわからないかは本人の自由で、私はどちらでもいいと思っています。みんな、一人一人特徴がありますから、チームのメンバーとして世界を目指す選手が居ていいし、みんなで楽しくやればいいという人も居ていいと思います。

先ほどの、地域の人たちとの交流というかスポーツをどうするかということは、一研究所が取り組む問題ではなく、大学が本気で取り組まなければいけません。単にスポーツだけではなくて、学問領域においても何においても、地域の人たちを巻き込まなければいけません。

そして、それをどの程度やっているかというのは、ここは私立大学とはいえ私学助成金をもらっているので大きな評価の対象です。ですから、専修大学は、地域とどう交流をして、どのようなことをやっているかです。施設もあり指導者も居るので、手っ取り早いのはスポーツです。これは、大学が全学を挙げて取り組まなければいけない問題だと思っています。

山田 今の話をもう少し続けていただければと思います。いわゆる地域の方々との交流を考えた場合、スポーツが手っ取り早いという話をされましたが、もう少し突っ込んで言うと、カレッジスポーツをどのように使えばいいで

すか。

松浪 まず、専修大学は大きな施設を持っています。四六時中その施設を使っているかといえば、多くの場合は使っていますが、その隙間を地域の皆さんや子どもに開放し、指導者を付け、安全に考慮しながら運営していくことは可能です。私は、そうすることによって交流が密になっていくと思います。

また、専修大学は、相当長い時間図書館を開館していると思いますが、図書館も子どもたちを含めて地域の人たちに開放するといえます。

私がこの大学に16年居て感じるのは、大胆さが無いということです。まじめと言っていますが、それは違います。できないのです。私は、今、外の人間になったから言えますが、この学校にはやっている人間を潰す癖があります。応援しません。普通は応援しますが、応援せずに潰しにかかります。だからもう何もしないほうがいいということになってしまうのが専修大学の特徴です。耳の痛い先生がたくさん居るかもしれませんが、真実を述べています。

山田 確かなことですが、その部分を100%受け入れた上で、さらにアイデアを聞きたいと思います。カレッジスポーツを考えた場合、地域と交流をするときに、今のようにハード面をオープンにする、あるいは地域に開放することは大事だと思いますが、ハード以外のソフトというか、特に、学生が地域と交流することによって、どのような新しい学びや発見があるか、その辺はいかがですか。

松浪 まず、一般学生の中でもスポーツの技能に優れた学生はたくさん居ます。これは実技の時間ですぐ分かります。彼らに協力を仰ぎます。そして、ボランティア精神を学生時代から身に付けてもらうようにします。体育会の学生だけを巻き込むのではなく、全学生が関わることによって、いろいろなプログラムができると思います。プログラミングが全てだと思いますが、生田とはいえ街のど真ん中にあるわけですから、たくさんの皆さんが期待していると思います。

山田 一つ、キーワードだと思ったのは、カレッジスポーツといった場合、つい体育会系

の学生のみということで片づけてしまう、それだと非常に狭くなる気がします。今ちょうど、そうではなく、一般学生も含めて全学生という話をされました。何か具体的な取り組みを日体大でしていますか。

松浪 手っ取り早いのは、お年寄りが深いプールで泳ぐときに問題がある可能性があるのも、プールの底を上げるなど水深を少し浅くして、お年寄りが泳ぎやすいようにする、あるいは、近隣の小さな子どもも泳げるようにするというふうに、大胆な形での開放をすればいいと思います。

山田 ありがとうございます。専修大学の話に戻します。先ほど、「後で詳しく」と言った部分です。具体的には、どんな形で交流、あるいはオープン化、開かれた大学を目指していますか。

佐藤 スポーツ研究所では、研究所主催の、中高年のための公開講座をしています。ところが、これは今年で15回目を数えますが、中年だった方がずっと続けているので、最近では中年の方が居ません。これは、継続ということで素晴らしい成果だと考えています。また、ちびっこレスリングなどの活動をしています。

山田 先日も新聞を見ていると、地域の、いわゆる体育クラブが70歳以上のシニアで溢れているという記事もあって、きっとそういう時代が来ているのでしょうか。そういう社会の構成、あるいは高齢化、あるいは少子化に対応を工夫しながら、大学が地域との交流を図っていくのかということは、とても大事だと思います。

例えば専修大学で言うと、実際にちびっこレスリングとか、ワンデーチームメートとか、いろいろな制度がありますが、そういうところに参加した学生はどういうふうに変わってきますか。

佐藤 参加者では筋力などが少ない方も、やっていくうちにスキルも上がっていきますし、体力的なレベルでも、継続すればしっかりとしたものになっていきます。ただ、もう一つ大切なのは、参加している方々や、それを指導する学生の活力というか、心の健康が非常に大きいと僕は思っています。

山田 そこまでうまくいかないと、まさに、講演の最後に話されたように、見るスポーツとしてみんな頑張れ、オリンピック・パラリンピックではメダル獲得を頑張れという話になったとしても、次にうまくつながらないような気がします。文化的価値を高めていくために、スポーツという一つの材料、一つのカードを使いながら、大学として地域のの人たちと交流を深めていけばいいのか、どうお考えですか。

松浪 例えば、アメリカの場合は、日本のように30も40もやるのではなくて、一つの大学で10種目に限って大学を代表するチームを持ちます。これは、アウェーもあればホームもあります。ホームでやるときは、地域の皆さんが年間のチケットを買って支えます。全然関係なくても、地域の皆さんがその大学のファンになって応援をします。そして、練習のときにもいろいろなボランティアなどの形で協力をし、チームの資金的な切符売りや、いろいろな形で近隣のファンがやってくれて交流が密になっていきます。

実は悲しいかな、そういう風土がこの国にはありません。としたなら、われわれが積極的にいろいろな形でお願いして回らなければいけないと思います。例えば、本学の報道はされなかったかもしれませんが、この前のオリンピック決定のときは、朝4時に集合してパブリックビューイングを行いました。アメリカンフットボールやラグビーの選手たちが、2万枚のチラシを近隣にポスティングしました。2万枚まいて2万人が来たら大変なことになりますが、そうすることによって、地域の人たちが大学に来てくれます。

例えば、今日のシンポジウムをするのに、2万枚のチラシを作ってポスティングをするなど、近隣とのパイプと、近隣の人たちが大学の情報を持ってくれるというようなことを、われわれが積極的にしていけないとうまくいかないと思います。その辺が、アメリカと違うところです。

山田 敢えて聞いていいですか。2万枚をポスティングするのは誰が決めますか。やろうと言っても、躊躇されませんか。

松浪 僕たちの広報課で決めますが問題は全然ありません。私がやったように見えますが、私はやっていません。

山田 違いますか。

松浪 何か催しをやるときには、とにかくチラシを積極的にまいて地域の皆さんに大学を知ってもらいます。もちろん、こういう催しがあるときも2万枚まくようなことをしています。

山田 日本の大学に必要と言ったように、専修大学にも40の体育会があって、中には非常に力を入れているところもあります。多様な大学スポーツが体験できる、教育を受けるといい面ももちろんあると思いますが、一方で、地域との関係で言うと、そういうふうに分散しているために、この大学はどんなスポーツをやっているのかということが、なかなか見えないことがあります。

その中で、例えば、Jリーグ構想などからJのクラブのほうに分かりやすいという部分があって、本来であれば、昔はカレッジスポーツが担った役割を、今の日本の社会では、クラブチームが担い始めているという部分があると思います。その辺はどうお考えですか。お二人にそれぞれ聞きたいと思います。

松浪 種目によると思います。カレッジスポーツが支えるか、クラブでもってスポーツ的に支えていくかは種目によって違うと思います。ですから、水泳やサッカーはクラブという形になりますが、他のものは学校でやるというふうになると思います。

山田 種目の問題ですね。佐藤先生はどうでしょうか。

佐藤 確かに種目があると思います。私の専門のテニスでも、クラブの影響は非常に強いと思います。レッスンというか、練習をするのにきちんとしたコーチが居ないとなかなかできないという特徴があります。

山田 どうでしょう、最後の質問をして、この1部を終わりにしたいと思います。

では、今、新しいカレッジスポーツは一体何が求められているのか、あるいは、カレッジスポーツのポテンシャルはどこにあるのかという質問をお二人にして、1部を締めたいと思います。よろしくをお願いします。

松浪 一番は人生の友を得ることです。これは、クラブをともした間柄であるが故に、

どんなに遠く離れたところで生活をしていようと、この絆は強固です。一番のポテンシャルは、チームメートの輪の中に、その人の人生を応援してくれる友、支えてくれる友を作ることです。いろいろなところに友達はできませんが、大学の中でスポーツをやったことの絆は、想像できないくらい大きなポテンシャルを持っていると思います。そして、どんなときでも助けてくれます。家族以上に助けてくれます。同じ釜の飯を食うということは、そういう存在を作ることだと思っています。

山田 ありがとうございます。では、最後に佐藤先生をお願いします。

佐藤 スポーツをしている人の姿を見て共感できるというか、感動できる場所を持っている人は非常に伸びていくと思います。映画監督の篠田正浩さんが、「箱根駅伝を見て感動する人が居るうちは、この世の中はまだ捨てたもんじゃないな」と言っていました。ぜひスポーツを見て感動できる学生をたくさん作っていききたいと思います。

山田 ありがとうございます。では、今日は8割方学生ですので、最後に、専修大学の教員に戻った気分で、専大の学生に対してメッセージをいただければと思いますがいかがですか。

松浪 専修大学の学生は案外スポーツ好きです。箱根駅伝に出るとなると、こそっと応援に行ったりする学生が多いです。選手が頑張ることによって、他の学生たちがもっと大きな刺激をもらってスポーツ好きになると思います。ですから、体育会系の学生には死に物狂いで頑張ってもらいたいと思います。負け癖が付き過ぎている印象がありますが、頑張ってもらいたいと思います。

山田 どうもありがとうございました。今日は、日本体育大学理事長というよりも、専修大学OBという雰囲気松浪先生でしたが、どうもありがとうございました。では、これで1部を締めたいと思います。

専修大学スポーツ研究所公開シンポジウム2013
カレッジスポーツのチカラを考える

【対談】

カレッジスポーツのポテンシャル ～スポーツを通じた社会貢献とその未来像～



スポーツ研究所所長
佐藤 雅幸



日本体育大学理事長
松浪 健四郎



専修大学文学部教授
山田 健太

